

第15章 自己点検・評価

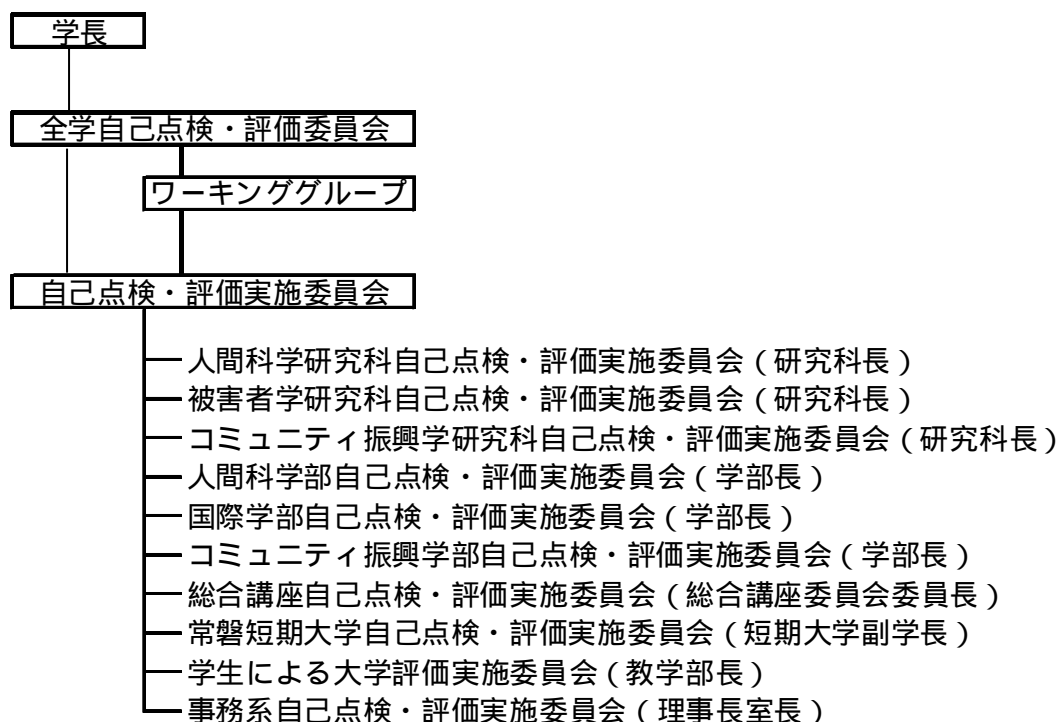
1. 自己点検・評価

〔達成目標〕

- 1 全学自己点検・評価実施委員会と各自己点検・評価実施委員会の責任と役割分担を明確にし、自己点検・評価活動が円滑に進むような体制を整備する。

〔現状説明〕

本学の自己点検・評価は全学自己点検・評価委員会規程に従い、以下のような組織によって行われている。



すなわち、学長の下に全学自己点検・評価委員会（以下、全学委員会）があり、その下に自己点検・評価実施委員会（以下、実施委員会）が置かれるという構成である。実施委員会は各研究科、各学部、総合講座、短期大学、学生による大学評価実施委員会および事務組織の各部署に設置され、それぞれの部署について、実際の自己点検・評価を行うことになっている。この実施委員会では、各部署の長が委員長を務めることになっており、委員長主導の下、全構成員が自己点検・評価の実施に関わることが求められている。このことにより、全教職員が少なくとも自分が在籍する部署の問題点や課題について、共通認識が持てるようにとの配慮がなされている。

全学委員会は、各年度の自己点検・評価実施計画を作成し、実施委員会に対して助言や調整を行うほか、各実施委員会が実施した自己点検・評価の結果を集約し、全学的な事項について点検・評価を行う

役目を担っている。全学委員会の構成員には、各実施委員会の委員長が含まれており、このことにより実施委員会間や、実施委員会と全学委員会との連携が密に取れるような体制になっている。なお、実施委員会との連絡調整を円滑に行うため、それぞれの実施委員会から選出された委員によるワーキンググループが置かれ、この組織によって報告書の編集作業等の実務が行われることになっている。

このように自己点検・評価を恒常的に行うための制度システムについては、整備されつつあるのだが、その運用についてはいくつかの問題点が指摘されている。ひとつは各実施委員会の執筆者に関わることである。大学の全構成員が何らかの形で点検・評価に関わるシステムを採用したことは、改善点・問題点の共有という点で大きく評価することができるのだが、担当箇所について十分な情報や知識を持たない者が、点検・評価を実施してしまうというような弊害も生まれてきている。二つ目は、全学委員会に関することである。多忙な各部署の長が委員となっているため、全員が参加して定期的に委員会を開催することが困難であり、これによって全学事項について深く検討することが難しくなっている。結果として、ワーキンググループが原案を作成し、回覧によって承認するという形をとらざるを得ず、本来の委員会の機能の一部を果たせていない。三つ目はワーキンググループに関する問題である。本来、各実施委員会から選出されるべきなのだが、これまでは実施委員会に関係なく、人間科学部、国際学部、コミュニティ振興学部からそれぞれ2名が選出されてきた。このため、報告書の編集作業をするための集団としては効果的に機能しているが、各実施委員会との連絡調整係りとしての機能は果たせていない。現状としては、ワーキンググループの委員長と副委員長が個別に対応し、調整を行っている。

〔点検・評価〕

上述のように、全学委員会と各実施委員会の責任と役割分担は明確に定められており、達成目標の一部はすでに達成されていると言うことができる。しかしながら、その運用状況についてはなお注意深く修正を重ねていく必要がある。また、定められた役割分担がその運用において、うまく機能しなくなってしまう原因のひとつとして、過密な日程があげられる。各実施委員会・全学委員会・ワーキンググループ間で複数回のやり取りが可能になるような、日程の設定が必要である。

〔改善方策〕

2008(平成20)年度については、各実施委員会での執筆開始時期を今年度よりも早めに設定することで、全学委員会・ワーキンググループとの調整期間を確保する。また、各実施委員会では適切な人物が点検・評価を行いながら、その結果を全構成員が共有できるような体制作りを行う。ワーキンググループには、各実施委員会の実質的な編集責任者が参加し、常時調整が行える体制にする。

2. 自己点検・評価と改善・改革システムの連結

〔達成目標〕

2 自己点検・評価報告書に記載された改善方策について、円滑な実施を可能にするシステムを構築する。

〔現状説明〕

自己点検・評価の結果明らかになった問題点については、関係部署および該当部署の構成員によって改善されることが求められており、それに伴う条件等の整備は学長が中心となって行うことになっている。また、結果に基づく中長期的な計画についても、学長を中心として進めていくことになっている。しかしながら、整備されるべき条件や中長期的な計画の中には、理事会の決定を待たなければならないものもあり、改善方策として明言することを一時留保せざるを得ない項目も出てきている。このことは2006(平成18)年度の点検・評価報告書においても指摘されていることであり、2007(平成19)年度からはこの弊害を極力縮小するため、常任理事(一貫教育・施設設備担当理事および人事財務担当理事)と学長が協同し、理事会に関わるような事項について整理していくことが決定されている。

〔点検・評価〕

現状のシステムを達成目標の観点から見ると、人的・制度的な支援については、学長および学長室の指揮の下、今後実行可能なものになって行くことが期待できる。しかし、効率的な実行のためにはある程度の費用が必要になることもあり、その予算を確保することが今後の課題となろう。大きな予算を伴う改善方策については、点検・評価の作業段階で常任理事との協議が可能になったことで、これまでよりも迅速な対応ができるようになった。今後はこのシステムが円滑に運営されて、改善策が順次実行されていくことが期待される。

〔改善方策〕

現状のシステムの円滑な運営を目指す。また、「自己点検・評価に基づく改善のための予算」について、理事会へ検討を依頼する。

3．自己点検・評価に対する学外者による検証

〔達成目標〕

3 自己点検・評価報告書の内容について、学外から意見を聴取するシステムを構築する。

〔現状説明〕

自己点検・評価の客観性・妥当性を確保するための作業は、報告書編集作業の過程で、2段階に分けて行われている。まず、各実施委員会で執筆された原稿は、ワーキンググループ内で、客観性・妥当性の検証と検討が行われる。この段階で、疑問点や客観性を欠いた記述などがあった場合は、実施委員会はその疑問点等に回答し、必要があれば修正を促されることになる。疑問点への回答および修正が修了した原稿は、全学委員会の全構成員に送られ、ここでもその客観性・妥当性が検証される。前述のように、全学委員会は各部署の代表から成っており、それぞれの部署の視点から検証することでその客観性・妥当性が高められている。

以上の2段階の作業のほか、前述のように2007（平成19）年度より、常任理事も自己点検・評価報告書作成作業の一部に加わるようになった。これによって、とすれば教学および事務の視点に偏りがちだった報告書の内容を、より大学全体的な視点になるよう改善されることが期待されている。

報告書は、学外の関係機関（大学基準協会、日本私立大学連盟、日本私立学校振興・共催事業団私学活性化支援促進センター、茨城県教育庁、茨城県教育会、茨城県私学協会他10ヶ所）にも配布されており、企画広報課を中心に、常に指摘や助言に対応できる体制になっている。

外部評価については2009（平成21）年度に大学基準協会の評価を受ける予定であるが、現段階で年度ごとに外部評価を受ける措置は講じられていない。

〔点検・評価〕

本学の自己点検・評価は、執筆・編集の段階で、客観性・妥当性が確保されるよう十分な配慮がなされており、その効果も高いものがある。ただし、達成目標の観点から見ると、学外に対して情報を公開し、意見を聴取する体制は整えられているものの、学外者による検証を必ずしも義務付けてはおらず、完全な目標達成には至っていない。将来的には茨城県私学協会の会員校と連携し、相互に評価し合うシステムを構築していくことも検討課題となるであろう。当面は本学独自の学外評価のシステムを作り上げる必要があり、学外理事や父母会の協力を仰ぐことなどが考えられる。

〔改善方策〕

学外者の検証について、学外理事および父母会等の協力を得られるシステムについて検討する。

4．大学に対する指摘事項および勧告などに対する対応

〔達成目標〕

4 大学に対する指摘・勧告に対応する体制を確立する。

〔現状説明〕

前述のように、本学の認証機関による外部評価は2009（平成21）年に予定されており、今のところ大学基準協会からの勧告などは受けていない。また、2004（平成16）年度のコミュニティ振興学研究所開設に伴い、文部科学省よりいくつかの留意事項が示されていたが、指摘された問題点はすでに是正され報告も終了している。

今後、新たな改組や外部評価の実施により具体的な指摘や勧告があった場合には、学長の指導の下、教学会議や全学自己点検・評価委員会が具体的な対応を検討することになる。

〔点検・評価〕

以上のように、達成目標については、ある程度準備ができていると評価することができる。ただし、具体的な指摘や勧告に対応するためには、それ相応の予算が必要となることも予想され、この点に関して、制度上・システム上の整備を行っていくことが必要である。

〔改善方策〕

理事会と協同し、「自己点検・評価に対する指摘や勧告に伴う予算」について検討を行う。